

# カルシユの足跡を追って

◇8◇

若松 秀俊

松江奥谷町の双子の官舎に向き合った二軒の家が渡部家二家族の家であった。ウッドマン家の向かいが渡部愛之助宅、カルシユ家の向かいはその分家であった。愛之助夫妻、長男忠、長女(竹内)紀代子、それに二男順が住んでいた。

松江奥谷町の双子の官舎に向き合った二軒の家が渡部家二家族の家であった。ウッドマン家の向かいが渡部愛之助宅、カルシユ家の向かいはその分家であった。愛之助夫妻、長男忠、長女(竹内)紀代子、それに二男順が住んでいた。

松江奥谷町の双子の官舎に向き合った二軒の家が渡部家二家族の家であった。ウッドマン家の向かいが渡部愛之助宅、カルシユ家の向かいはその分家であった。愛之助夫妻、長男忠、長女(竹内)紀代子、それに二男順が住んでいた。

## 近所の人々

愛之助は松江高校の創立以来の学務課担当であった。二人の息子も同じ学校に通い、忠は十六期生、順は二十期生である。

## 渡部家と親密な付き合い

愛之助は松江高校の創立以来の学務課担当であった。二人の息子も同じ学校に通い、忠は十六期生、順は二十期生である。

愛之助は松江高校の創立以来の学務課担当であった。二人の息子も同じ学校に通い、忠は十六期生、順は二十期生である。

愛之助は松江高校の創立以来の学務課担当であった。二人の息子も同じ学校に通い、忠は十六期生、順は二十期生である。

愛之助は松江高校の創立以来の学務課担当であった。二人の息子も同じ学校に通い、忠は十六期生、順は二十期生である。

愛之助は松江高校の創立以来の学務課担当であった。二人の息子も同じ学校に通い、忠は十六期生、順は二十期生である。



カルシユ旧宅の前で桑田氏、隣家の母子と歓談する筆者(右端)

ト(赤カブ)とタマネギの皮を剥いて卵を染めた、メヒテルトが教えてくれたが、紀代子には何のことか分からなかったという。

後日、リンゴをそのお返しというか、お礼にカルシユ家にあげた。リンゴは愛之助が学務事務を務めていたこともあって、生徒の故郷からの贈り物であったという。リンゴや卵は当時高価なもので、裕福なカルシユ家でもそんなに食べられるものではなかったであろう。

夏休み、フリッツと別々にエンメラがメヒテルトを連れて軽井沢に出かけたとき、飼っていた黒犬のボチが道端の堀のなかで口を突き刺して死んだ。それを嘆き悲しむエンメラの様子を、紀代子は印象深く目撃したという。

復活祭には、紀代子はある。渡部家では正月にカルシユ夫妻を家に招いて餅を、また雑煮やおせち料理を、ちそうした経験がある。英語を学んでいる卵といわれる。ビーがある。英語を学んでいる

た思はよくウッドマン家の次女のエレーナの面倒をみていた。夫妻は夏休みには軽井沢に出掛けた。エンメラはドイツ人が多く住んでいた軽井沢行きを楽しみながらお世話していた。その間、紀代子は猫を預かった。餌は主にかつオ節だったが、普段は魚の残りかきを煮た。たとえば、カルシユ家のお手伝いが砂糖を買ってきたとき、袋の縁をたいて、大事に容器に移す様子を見たという。ドイッ人というものは「そういうことを丁寧にやるものか」と感心したという。隣のウッドマン家の火事とききは、渡部家の庭だけでなく、この桑田家の奥へも荷を運んだ。(東京医科歯科大学大学院教授)

文中敬称略